平成6年12月1日発行　明治31年4月20日　第3種郵便物認可　(毎月1回1日発行)　第140巻 第9号　ISSN 0287-2706

英語青年

THE RISING GENERATION

特集：ウォルター・ペイター

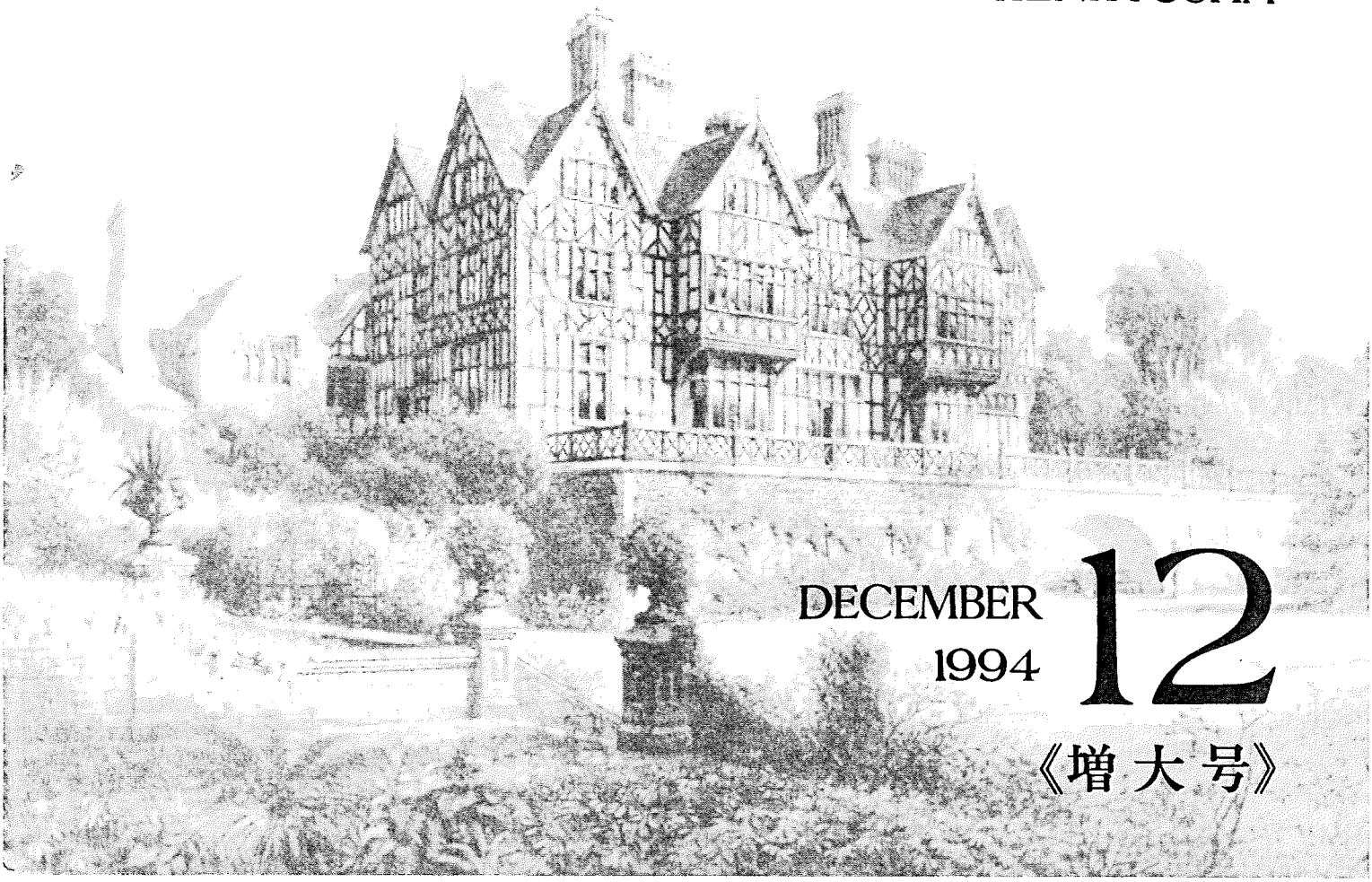
川村二郎・富士川義之・澤井 勇・小田原克行
玉井 暲・伊藤 勲・都築佑吉・萩原博子
辻 邦生・清水 徹

今日のスティーヴンソン／杉山洋子

T. S. Eliot's *Clark Lectures*／J. S. Brooker

ホーソーンと『日本遠征記』／阿野文朗

KENKYUSHA



DECEMBER 1994 12
《増大号》

平成 6 年 12月1日 発行 / 明治31年4月創刊 総 号 1750 号

第140巻 / 第9号

英語青年

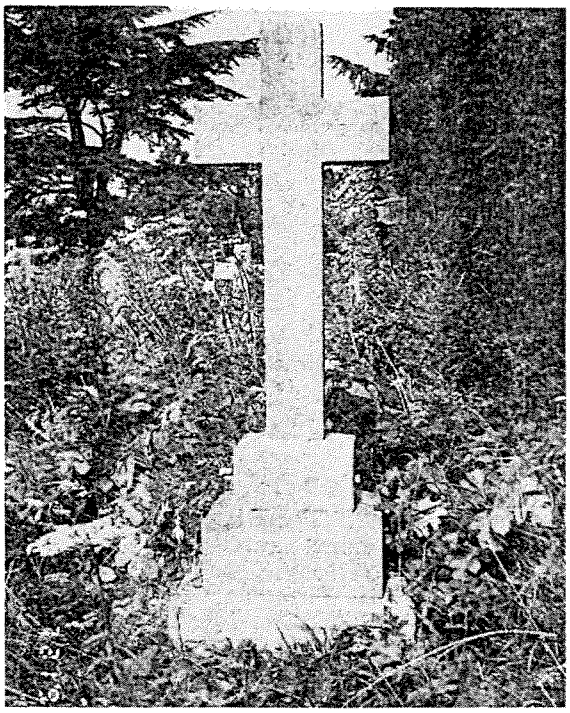
Vol. CXL No. 9

THE RISING GENERATION

December 1, 1994

目 次

特集：ウォルター・ペイター
対談 ウォルター・ペイターの魅力 . . . . . 川村二郎・富士川義之 426
思想家としてのペイター . . . . . 澤井 勇 435
同性愛者ペイター . . . . . 小田原克行 438
Pater と Wilde——the literary architecture をめぐって . . . . . 玉井 暲 441
近代のナルキッソス . . . . . 伊藤 勲 444
日本におけるウォルター・ペイターの受容 . . . . . 都築 佑吉 447
ペイター国際学会の今昔——その始まりと経過 . . . . . 萩原 博子 450
ペイターへのささやかな私見 . . . . 辻 邦生 453
シャルル・デュ・ボスのペイター論のこと . . . . . 清水 徹 454
邂逅録(その6)——Cambridge のなつかしい先生(ドン)たち(その2) . . . . . 近藤いね子 455
今日のスティーヴンソン . . . . . 杉山 洋子 456
T. S. Eliot's *Clark Lectures*: Crisis and Decay in European Literature . . . . . J. S. Brooker 459
太平洋のこちら側から——*MEMENTO MORI* . . . . . 金関 寿夫 463
ホーソーンと『日本遠征記』 . . . . . 阿野 文朗 464
音韻と自然(現実)(2)——Derek Walcott の場合 . . . . . 徳永 暢三 468
ヘンリー・ジェイムズ点描(9) . . . . 大津栄一郎 472
さまよえる旅人たち(21)——いずこへ：20世紀の旅人たち . . . . . 荻野 昌利 476
フィロロジーの道(4)——Between the Acts (上)：ロンドン、ケンブリッジ、ミュンヘン . . . . . 小野 茂 479



W. ペイター墓碑
Holywell Cemetery in St Cross Church

来日した Alicia Suskin Ostriker について . . . . . 矢口 以文 482
海外新潮
Text の拡散 . . . . . 笠原 順路 467
Edith Wharton の伝記的研究 . . . 上岡 伸雄 471
Metrical Grammar . . . . . 寺澤 盾 475
Books from Abroad 484
Stephen Copley and Peter Garside (ed.): *The Politics of the Picturesque: Literature, landscape and aesthetics since 1770* (野中涼)——Richard Pearce (ed.): *Molly Blooms: A Polylogue on "Penelope" and Cultural Studies* (川口喬一)
新刊書架 486
定松正編『ルイス・キャロル小事典』/ 稲木昭子・沖田知子著『アリスの英語 2——鏡の国のことば学』(深澤俊)——池上日出夫著『アメリカ文学の源流 マーク・トウェイン』(後藤和彦)——安井泉・鈴木英一著『動詞』(「現代の英文法」8) (大庭幸男)——中尾祐治・天野政千代共編『助動詞 Do 起源・発達・機能』(遊佐典昭)——中村保男著『続・英和翻訳表現辞典』(小鷹信光)
Half-timbered House Designed by Axel Haig, 1873 (表紙について) . . . . . 鈴木 博之 486
英文解釈練習 . . . . . 飛田 茂雄 491
和文英訳練習 . . . . . 成瀬 武史 493
イギリス文壇ニュース . . . . . M. H. 495
Eigo Club 495
Corners 496
片々録 497

表紙：Half-timbered House, 1873

Text の拡散

9月号本欄で Jack Stillinger, *Multiple Authorship and the Myth of Solitary Genius* を紹介しながら authorship の拡散について述べた直後に、同じ著者によるその姉妹編ともいうべき論考が出た。題名は *Coleridge and Textual Instability: The Multiple Versions of the Major Poems* (Oxford, 1994) である。手前味噌を承知で言うが、偶然とはいいながら絶妙のタイミングであった。ただ、このことからも分かるとおり、authorial multiplicity の考え方は必然的に textual multiplicity の考えに通ずるものなのである。

さて Stillinger によると、*The Ancient Mariner* を例にとれば、全部で18の version があるという。つまり出版されたものだけでも *Lyrical Ballads* (以後 *LB*) が初版、1800年版、1802年版、1805年版と4種類、1817年の *Sibylline Leaves* (以後 *SL*), 1828, '29, '34年の3巻本詩集と計8つ。他に例えば、Coleridge が1800年7月中旬に *LB* の印刷業者 Biggs and Cottle に書簡で要求した改訂版 (Griggs, I, 598-602) や、1806年10月の Notebook に記載されている部分修正 (II, 2880)、さらには、*LB* 初版本や *SL* に書き込まれた手書き修正などがあり、結局、1798年の「比較的単純な罪・罰・部分的贖罪という物語」が、最終的には「歴史的・社会的・道徳的・神学的意味合いを含んだ重層的物語(群)」に変化している、という。

Stillinger は、Coleridge の7篇の「主要韻文作品」(*The Eolian Harp, This Lime-Tree Bower, Frost at Midnight, The Ancient Mariner, Kubla Khan, Christabel, Dejection*) に対して計94の versions を数えあげ、1912年の Ernest Hartley Coleridge 編の全集以来新たに発見された諸事実をふまえて、かつて Keats の本文を校訂した時の手際よさで、これらの詩に1篇を加えた計8篇の詩の本文を、apparatus とともに、巻末の Appendix に総ページ数の3分の1以上を割いて提示している。Bollingen Series で予定されている J.C.C. Mays 編の *Poetical Works* が未刊行の現在、これは、Coleridge 研究にとって無視できない業績である。いや、Stillinger 曰く、My belief, however, is that the present study . . . will be as relevant and timely *after* the publication of May's edition . . .

Shelley の本文校訂の第一人者 Donald H. Reiman もこうした現象に着目し、*Romantic Texts and Contexts* (University of Missouri Press, 1987) において、これを "versioning" と名付けている (pp. 167-80)。

Text の versioning 現象の最先端を行っているのが Wordsworth 研究であろう。Wordsworth という詩人自身が、Coleridge にまさるとも劣らぬほどに多くの version を作っているからである。詩人が約半世紀にわたって改筆に改筆を重ね、結局生存中に出版されることのなかった *The Prelude* に1850年版と1805年版があるのは今では周知の通りだが、近年では、詩人の傍系の子孫 Jonathan Wordsworth によって 'The Two-Part *Prelude* of 1798-99' (*JEGP* 72) や 'The Five-Book *Prelude* of Early Spring 1804' (*JEGP* 76) までも提唱されてきている。

Jonathan Wordsworth は、versioning の最先端を行く学者で、*The Prelude* の version 化に一役買う前は、*The Ruined Cottage* のテクストを確定したことで知られている。そもそも、この作品は、1814年に *The Excursion*, Book I の一部として出版されたもので、出版にいたるまで実に複雑な過程を経ている。*The Ruined Cottage* という名称そのものは詩人の妹 Dorothy の書簡にもあって、これが一個の作品と見做されていたことは確実なのだが、結局出版されたのは詩人の死後約一世紀を経た1949年のことであった。ただしこの時も作品として一人前の扱いを受けたわけではなく、Helen Darbishire が改訂した OET の5巻本の Wordsworth 全集の *The Excursion* の註に、1798年の草稿 (MS B) が活字になっただけであった。その20年後の1969年、Jonathan Wordsworth は *The Music of Humanity* において *The Ruined Cottage* の1799年の草稿 (MS D) と、*The Ruined Cottage* の一部となるべく計画され Coleridge も独立した作品として認めていた *The Pedlar* を出版したのであった。今では *The Ruined Cottage* MS D, *The Pedlar* も The Two-Part *Prelude* も Cornell 版 Wordsworth 全集に収録され canon として確立したと言ってよい。Textual multiplicity の考え方は、コーネル大学出版のようなパトロン(?)を得て初めて具体的な形をなすのである。

ついでながら最近の Jonathan Wordsworth は、Robert Brinkley & Keith Hanley 共編の論文集 *Romantic Revisions* (Cambridge, 1992) の巻頭に 'Revision as Making: The Prelude and its Peers' を寄せ、revisionist としての健筆ぶりを示しているばかりか(無論この場合の revision とは、作品もしくは草稿の改筆のことである)、有名な Preface ゆえにとかく1800年版と1802年版に関心が集中する傾向にある *LB* の初版本 (1798) を再評価する講演や、自分で確立した The Two-Part *Prelude* of 1798-99 の価値を認める講演などを、わが国でも全国各地で精力的に行なっている最中である。　(笠原　順路)

個人消息

(五十音順)

▲ 淺田　壽男氏(北九州大教授) 転居：811-41 宗像市青葉台 2-1-7. Tel：0940-32-6777.

▲ 岩崎　正也氏(長野大教授) 10月1日から来年3月31日まで、同大学在外研究員としてジョージタウン大学で研究に従事。滞在先：2515 K St NW #112, Washington DC 20037, U.S.A. (FAX：202-965-4046)

▲ 澤田　敬人氏(静岡県立大講師) オーストラリアのグリフィス大学およびクイーンズランド大学での客員研究を終え、10月に帰国。

▲ 高山　誠太郎氏(武蔵工業大教授) 9月2日午後5時55分(現地時間)、心不全のため、滞在先の英国の病院で逝去。68歳。

▲ 南塚　隆夫氏(東京農工大教授) 文部省在外研究員としてイェール大学での1年間の研究を終え、8月31日に帰国。

▲ 山田　明子氏(光華女子大教授) 4月より来年3月末まで、ケンブリッジ大学 Darwin College に留学。滞在先：46 Shelly Garden, Cambridge, CB3 0BX, U.K.

新刊書一覧

(出版社の五十音順、税込価格)

『アメリカの二つの国民』 アンドリュー・ハッカー著、上坂昇訳、1994年7月、四六判370頁、3,090円、明石書店。

『自然と詩心の運動——ワーズワスとディラン・トマス』宮川清司著、1994年9月、A5判314頁、6,180円、大阪大学出版会。

『リスニングの指導』(「英語教師の四十八手」7) 渡辺浩行著、1994年6月、A5判 vi+112頁、1,450円、研究社出版。

『森の夜明け——エミリ・ディキンスンの告白』落合久江著、1994年7月、A5判430頁、980円、講談社出版サービスセンター。

『世界の食卓とこころ』婦人国際平和自由連盟編、1994年8月、四六判 xiv+328頁、1,500円、こびあん書房。

『父マーク・トウェインの思い出』クララ・クレメンズ著、中川慶子・的場朋子・宮本光子訳、1994年8月、四六判 iv+472頁、3,605円、こびあん書房。

『チョーサーの英語——発音と形態』アーサー・O・サンヴェッド 著、三輪伸春・小城義也・佐藤哲三・濱崎孔一郎・田中俊也訳、1994年8月、A5判 viii+178頁、2,575円、松柏社。

『ロレンス・スターンの文学——スターンとその人物たち』能美龍雄著、1994年9月、四六判 iv+248頁、3,090円、松柏社。

『アイルランド演劇選集』久保田重芳訳、1994年7月、A5判294頁、2,800円、青山社。

『死と復活——米国奴隷文学 1701-1865』小池関夫著、1993年12月、A5判294頁、3,000円、聖母の騎士社。

『英作文用法事典 [II]』望月昭彦著、1994年7月、A5判818頁、6,695円、大修館書店。

『ヴェネツィアの光と影——ヨーロッパ意識史のこころみ』鳥越輝昭著、1994年8月、四六判344頁、2,472円、大修館書店。

『野生の実践』(「シリーズ・ナチュラリストの本棚」別巻)ゲーリー・スナイダー著、重松宗育・原成吉訳、1994年8月、四六判270頁、2,200円、東京書籍。

『イギリスの貸本文化』清水一嘉著、1994年3月、四六判394頁、4,429円、図書出版社。

『愛書家のケンブリッジ』高宮利行著、1994年8月、四六判258頁、2,369円、図書出版社。

『詩の原郷』(「詩論・エッセー文庫」5) 石原武著、1994年7月、四六判146頁、1,300円、土曜美術出版販売。

『ラヴ・レター——性愛と結婚の文化を読む』度曾好一著、1994年8月、四六判280頁、1,600円、南雲堂。

『イギリス怪奇探訪——謎とロマンを求めて』出口保夫著、1994年7月、A6判238頁、520円、PHP研究所。

『エグゼクティブの口語英語事典』井内邦彦著、1994年7月、新書判 x+196頁、1,300円、北星堂書店。

『豊穣の風土——現代アイルランド文学の群像』佐野哲郎編、1994年8月、A5判426頁、5,000円、山口書店。

『悪魔詩人ジョン・キーツ』奥田喜八郎著、1994年8月、A5判xii+238頁、3,000円、山口書店。

Wilna's Spirit Is Still Alive, 萩原博子編著、1994年6月、A5判 xiv+244頁、2,500円、雄松堂出版。

『ことばといのち』遠山清子著、1994年7月、A5判 vi+250頁、4,000円、雄松堂出版。

● 編集後記　「片々録」欄の最初に3つの賞の報告が並びました。受賞の皆さま、おめでとうございました。大佛次郎賞については、大佛氏自身が戦後短期間とは言え小社の雑誌編集に携わられ、亀井氏の書物が小誌の連載から誕生したことと併せて、目に見えぬ縁を感じました。大江氏のことは言わずもがなですが、その最良(とこちらが考える)作品における文章の喚起力は比類がない、と感じさせられます。自ら書く人であると同時に読む人である、と折にふれて述べられていることの証が、そこにあるように思います。柳瀬氏の受賞は、「リ・リジョイスフル!」。▲ ペイターは賞を受けるといった華やいだことには無縁の人でしたが好きな人はそれ故にこそ、この文人に愛着を感じるのでしょう。▲ 次号は短期の新連載を2本掲載予定。

英語青年
12月号
第140巻 第9号
平成6年12月1日発行
特別定価 1000円
(本体971円　送料92円)
© 研究社出版株式会社 1994
編集人　山田浩平
発行人　荒木邦起
印刷所　研究社印刷株式会社
発行所　研究社出版株式会社
〒102 東京都千代田区富士見 2-11-3
電話　東京 (03)3288-7740 (編集)
東京 (03)3288-7777 (販売)
振替口座　東京 7-83761